

まっで KO SO!

過去の記事は
こちら

研究も偏見排除で可能性拡大

多様性求められる社会

最近、ある国際学術誌から来年度発行予定のひとつの号に「special issue」として特定のテーマについて取り扱う特集の編集依頼を受けた。20人程度の著者候補に執筆を依頼する必要があるのだが、候補者の要件として雑誌側から求められたことは、「研究分野、人種、性別、所属組織の国や地域についての多様性」だった。

このプロジェクトに共同編集者として一緒に取り組む米国の研究者は、さらに「キャリアステージ」の項目も盛り込んで、幅広い人選が始まっている。このような多様性志向は、研究に限らず、社会活動のあらゆる局面で加速度的に強まっている。

私は学位取得後、結婚した後に米国への留学の機会を得た。そのときには2歳になる娘がおり、研究者である夫とともに家族3人で5年余り米国に暮らすこととなった。子供を持って働く、ということへの理解は日本と比べ段違いに進んでいた。というより、キャリアを確立する段階では大抵の人は幼い子供を持つ年齢にあたるので、男女を問わず、周りの多くの人と同じような状況だった。

一方、娘は2歳というほとんど話せない年齢での渡米であったので、英語が第一言語となった。さらに、人格形成の第一段階といえる時期を、多様な国籍やバックグラウンドを持つ子供

たちと過ごしたため、多様性を受け入れるなどということは、ほぼ意識の外にある自然な感覚だったに違いない。日本人であるということ意識するようになったのは、むしろ帰国してからのことだろう。

実は、帰国後の学校生活で、あやしい日本語をしゃべる娘が孤立してしまわないかと必要以上に心配したのは私たち親の方だった。結局、日本の公立学校ではなく、インターナショナルスクールに通わせることを選んだ。ここでもまた、何らかの事情(あるいは積極的な理由)があってインターナショナルスクールを選んださまざまな家族との出会いがあった。



久堀智子さん

多様性は、私の専門領域でも重要な考え方である。研究する「病原体制御学」は、その名の通り「ウイルスや細菌などの病原体をどうやったら撲滅できるか？」を突き詰める学問だと一般には受け取られている。

ところが別の角度で考えてみると、この単純な生き物たちが免疫系のジャングルをかいくぐって宿主(ヒト)の中で生きるための精緻で巧妙な仕掛けが見

えてくる。偏見を捨てて見方を変えれば、細菌やウイルスも人類の発展に役立つ可能性が見えてくるのだ。

研究においても、ひとつの現象についてさまざまな研究者が多様な視点で掘り下げてこそ、科学は健全な方向に進んでいく。人間社会においても、多様な考えや価値観に照らし合わせ



病原体制御学の専門家として研究に携わる筆者

て、物事を論じることが重要になっていると思う。

くぼり・ともこ 岐阜大



大学院医学系研究科・病原体制御学分野准教授。専門は病原微生物学。総合研究大学院大学修了(理学博士)。

大学院医学系研究科・病原体制御学分野准教授。専門は病原微生物学。総合研究大学院大学修了(理学博士)。